



Title	痛みの描写の言語ゲーム：内的状態に対する外的基準の要求は一般化できるか
Author(s)	丸田, 健
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 171-182
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9279
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

痛みの描写の言語ゲーム

——内的状態に対する外的基準の要求は一般化できるか——

〈要旨〉

次の考えは、しばしばヴィトゲンシュタインのものとされる——「内的状態には外的基準が必要であり、外的基準を含む公的規則は、それに従っていることと、従っていると思っていることが、区別できるものでなくてはならない。」この要求は一般化されがちな傾向があるようだ。それは、たとえばヴィトゲンシュタインのいわゆる私的言語論の標準的解釈に見られる。この小論では、この姿勢を見直すことを提案したい。見直しは、痛みの質の記述の際の言語使用を点検することで行なわれる。痛みの記述は、ある言語を母語として、あるいは母語同様に、使いこなせる人にとってさえ、難しいことが多々ある。私が指摘しようとすることは、これは、この言語ゲームでの語の使用は、語の適用基準を示すことで教えられるものではないからだ、ということである。言語使用の展望を得るためには、特定の哲学的テーゼの一面的食事に対し、慎重になる必要がある。

キーワード

ヴィトゲンシュタイン、内的状態、外的基準、痛みの質

丸田 健

1 導入——検討する見解の提示

まず、問題にしたい二つの考えを掲げる。

(1) 「内的状態には、外的基準が必要である。」

(2) 「規則に従っていると思うことは、規則に従うことではない。」

これらは、典型的にヴィトゲンシュタイン的な考えだとされている。(1)は『哲学探究』の五八〇節のヴァリエーションである。^①

そして(2)の由来は二〇二節である。彼の哲学を踏まえて、心の哲学の問題を扱うとき、上の二つの考え方を一般化する傾向があるように思われる。しかし、日常言語の使用のすべての場面でこの考え方を適用できると、ヴィトゲンシュタイン自身が考えていたかどうかは疑問である。彼は哲学における一面の食事を警戒していた。後期の彼の考えには、ある哲学的テーゼを立てた上で、それに見合うように日常言語を扱う、という姿勢はなかった。そうではなく、彼にとっての課題は、日常言語を所与のものとしてしっかりと見据え、言語使用の全体の展望を得ることであった。この小論は、このような態度に従おうとするものである。

さて、冒頭の考えを一般化しつつ、さまざまな考察を進めて行こうとする傾向の、論理的根拠は次のようなものだ、と想像される。

(1) の根拠——言葉には、使用の公的規則が必要である。使用規則がない言葉は、使用方法が不明なため、使用を持たない。また、言葉の意味は、その使用にある。よって、使用規則がないために使

用方法が分からない言葉には、意味もない。このように、言葉の使用・意味には公的規則が必要である。だから内的状態を表す語にも、公的規則が必要である。ここで、外的基準は公的規則の一種であるため、内的状態には外的基準が要るのである。

痛みを感じるように説明することは、この考えの適用の適切な例だとされるだろう。

痛みの外的基準は、痛みの自然な表れである。それは、転んで怪我をしたときに、子供なら泣き叫ぶ、といった振る舞いである。あるいは虫歯があるときに頬を押さえるといった、身体的な表れである。言葉を学ぶとき、子供たちは、他人のこういった振る舞いを見て、「あの人は痛がっている」と言うように教えられる。また自分の同じような振る舞いを「痛い」という言葉で置き換えるように訓練される。「痛み」の意味は、このような外的基準によって与えられる。(それは、本人だけにしか分からない私的な感覚を指しているのではない。)

(2) の根拠——言葉の使用には、公的規則が必要である。このため、言葉の使用には、公的規則に照らし合わせて、正しい使用と間違った使用とがある。正しい意味が見いだされるのは、規則に従った、正しい使用の中である。さて、ここで仮に、規則に従っていると使用者が思っていることが、イコール、規則に従うことだとする。すると使用者が正しいと思っている使用は、なんであれ正しいことになる。すると、あらゆる使用が、「正しい」使用になりかねない。そうなのは言葉の使用が混乱し、意味が混乱する。そして

意味は失われる。「正しい・正しくない」は、判断されるものを、それとは独立の物差しで測ったときに生じる結果である。つまり物差しは測るものの都合で、伸び縮みしてはいけない。言語使用の規則とは、まさに各使用者とは独立の物差しなのである。よって、規則に従うことと、従っていると思うことは区別されねばならない。そして(1)で触れられた外的基準は、このように考えられるべきもののなのである。

以上が(1)と(2)の合理的根拠である。

(1)と(2)の考えから、得られる哲学的洞察は確かに多い。しかし二つを一般化してしまうことについては注意を要する、と私は考える。この、「内的状態を示す語の適用には規則が要り、規則にはそれに実際に従っていることと、従っていると単に思っていることの区別が要る」という考えを一般化するならば、それは論理的な要請の性格を帯びるだろう。つまり、それは言語使用の観察・記述から、得られた洞察だとは思われないのである。というのも、上記の理論に当てはまらない言語使用は、われわれの言語の中に、数多く見つかると思われるからだ。^①この論文の目的は、その一例を示し、特定の考えの早急な一般化・それによる一面的食事を、避けようとする^②ことに^③ある。

2 痛みの質にまつわる疑問

私が一例として取り上げるのは、痛みの質の説明に関する言語使

用である。痛みには質がある。感じている痛みがどんな種類のものをか述べることは、痛みの描写(Description)だと言える。人に、自分の痛みを描写するように頼めば、私たちは、その中に、痛みの質を表す言葉が入っていることを期待できるだろう。

ヴィトゲンシュタインは、痛みの質の描写について、何を考えていただろうか。彼は次のように言っている——痛みには、他の感覚の概念と同じく、「程度と質の混合がある」^①。いま引用した箇所では、ヴィトゲンシュタインは、心的概念の「質」の探究も、心理的概念の扱いの計画に含めている。しかし実際に彼が、痛みを質の側面から考察しようとした形跡は、残念ながら、遺稿にはほとんど見られない^②。

たとえばヴィトゲンシュタインは、ある箇所で、「燃える火のよう^③な」と形容される痛みについて、通り過ぎるように触れている。この痛みの質の短い扱いの中では、「どうしたら感じていることを正しく描写できるか、考えさせてみよ」と言われている。ここでは正しさの公的基準が求められている、と考えるべきだろうか。痛みの質の正しい描写とは、どういうものだろうか。さまざまの疑問が浮かび上がるが、ヴィトゲンシュタイン自身は、この話題をこれ以上追及していないのである。

痛みの質への言及は少ないものの、痛みの程度については、もう少し多くのことが書かれている。ヴィトゲンシュタインはこう言っている——「『われわれはよく「分からない」という表現を、おかしな仕方を使う。たとえば、この男は、あの男より感じていること

が強いのか、それとも感じていることをより強く表現しているだけなのか、分からない、と言う。こういうとき、どのような探究がこの疑問を解決するのか、はっきりしない^①。しかし——「……この表現は空回りしているのではない……」

ヴィトゲンシュタインはこうも言っている——「痛みには、程度の概念はありうるのだろうか。」外的基準は、ひどい痛み、中程度の痛み、軽い痛み、といった、おおまかな尺度を与えはする。しかし、それはヴィトゲンシュタインも触れたような微妙な疑問を解消しないだろう。「彼女は私より痛みが『実際』ずっと小さいのだろうか。それとも『同じくらい痛いのだが』それを小さいものだと思っているのだろうか。それとも『同じくらい痛いのだが』それほど感じない人なのだろうか。私は小一時間、考えていた。」^②これは、ある人が、同じ病室にいる人について、思いめぐらしたことである。感覚が問題になっているとき、このような疑問は、日常的体験に照らして、何ら特異なものではない。「他人の痛みは分からない」という表現は、かなりふつうに使われるが、このように言いたくなる動機は、たとえば上のような日常の体験に重なる。

われわれは、痛みの質についても、ヴィトゲンシュタインが痛みの程度について触れたのと似た疑問を感じることがある。他人の感じている痛みは、いったいどんな感じなのか。例えば、次のように言われることがある。「痛みはプライベートで、個人的な体験であるため、他人の痛みがどう感じるか、はっきり分からない。生埋痛や陣痛がどんな感じかは、男性には到底分からない……」男が、陣痛

がどう感じられるかを理解できるなら、それは、女性の側の言語表現が存在するかぎりにおいてであろう。しかし男にとって、陣痛がどう感じられるかは理解しがたいと言うなら、それは、そのような言語表現だけしかないからである。そして、このように言うなら、これは男性と女性の違いだけに当てはまるものではないはずである。

3 痛みの描写の言葉

確かに、われわれは、痛みがどう感じられるかを表す言葉を持っている。言語によって表現方法の違いはあるだろうものの、痛みの質を表す言葉は多様である。たとえば「剣山を刺す」や「電気が走る」などといった表現がある。また「燃えて焼けるようだ」や「天ぷら鍋の中に足を突っ込んだようだ」といった言葉もある。

痛みの測定に作成された、「マギルメルク式痛みに関する質問表 (McGill Pain Questionnaire)」^③というものがある。この質問表は、感覚的、感情的、評価的、その他、のカテゴリーに、痛みを分けている。感覚的カテゴリーは痛みの質に相当していると考えられる。またその他のカテゴリーにも、痛みの質と関係があるものが若干、含まれる。痛みの質と関係があると思う項目を、参考のために書き出すが、英語の語彙には痛みの質を一語で表せるものが非常に多い——

flickering, quivering, pulsing, beating, pounding, jumping,

flashing, shooting; pricking, boring, drilling, stabbing, lancing; sharp, cutting, lacerating; pinching, pressing, gnawing, cramping, crushing; tugging, pulling, wrenching; hot, burning, scalding, searing; tingling, itchy, smarting, stinging; dull, sore, hurting, aching, heavy; tender, taut, rasping, splitting; spreading, radiating, penetrating, piercing; tight, numb, drawing, squeezing, tearing. ⑩

リストの中には、日本語との対応が比較的容易な言葉も見つかる。日本語には、こういった表し方のほかに、「擬態語」を使う仕方もある。たとえば、「ズキ（ン）ズキ（ン）」、「ジンジン」、「シクシク」、「クチク」、「キリキリ」、「ヒリヒリ」である。

4 痛みの描写の難しさ

痛みを説明する言葉は、このように非常に多様であるが、自分の痛みを伝えることはそれほど容易ではない。伝えることが切実であればあるほど、その困難が実感されることは、まれではない。次の言葉は、この困難を表している。「ひどい痛みを感じ、友人や医者にその体験を描写してみようとする人は、しばしば言葉に詰まる」⑪。また「ふだんは言語明瞭な人が、どう言えば自分の「痛みの」体験を正しく述べられるのかについて、混乱し不確かになることがあるのは、重要だ」⑫。ヴァージニア・ウルフは、次のようにさえ言っ

ている——「ハムレットの考えやリアの悲劇を表せる英語には、寒気や頭痛を表す語がない……痛がっている人に、頭痛を描写させてもらなさい。すると言葉はただちに涸れてしまう。」⑬

なぜ痛みの質の描写は難しいのか。描写できない痛みには、表されるべきものが、結局ないのだろうか。次のような状況を考えてみる。ある患者が「足が痛くて、どうしようもない」と訴えたのに対し、医者の方は「それはどうしようもない痛みだ」と片付けた。これはまったく、投げやりな返答に聞こえるだろう。また医者に痛みの性質などを尋ねられて、ただ「うずいてのう」としか言えない農婦がいる。⑭しかし、これらの患者たちは、「どうしようもない」という性質の痛みや、性質のない痛みを感じていたのではないだろう。われわれの言語ゲームでは、むしろ、彼らは言葉が足りなかった、と言うだろう。彼らにも表されるべきものはあった。ただ、彼らは自分の痛みの質を、どのように表してよいか、分からなかったのだ、と言われるであろう。

痛みがどう感じられるかを、いつも言葉豊かに表現できる人にとっては、それだけ多くの痛みの体験がある、とある意味では言える。雪を細かに分類するイヌイットにとっては、それだけ多くの種類の雪があるのと同じである。しかしその反面、自分の痛みをうまく表現できない人には、それだけ痛みの種類が乏しいわけではないだろう。これも雪の例と比べてみれば、納得が行くことである。

こう言ってもいいだろう。痛みがどう感じられるかを言うとき、私たちは痛みの質を感じ取り、それを表す言葉を探し、その言葉こそ

の質に当てはめる。表されるべきものがあり、それに対して、それを表す言葉を使うのだ。「どうしようもない」と言ったり、黙りこくるのは、言葉が見当たらない場合である。

5 疑問——痛みの描写はどのように教えられるか

では、ある語が自分の痛みをよく表すだとか、どんな表現も見当たらないだとか言うとき、特定の語が、適当なものかそうでないか、どうして分かるのか。「鋭い」や「脈打つ」といった語を痛みに当てはめたり、当てはめなかったりすることは、自分の体験に限られている。私は、こういった語を他人の痛みには当てはめない。私は、他人がどんな種類の痛みを感じているか、見て取れない。もちろん、他人に「鋭い」という語が、彼の痛みに当てはまるかを尋ねはできる。そして彼の返事次第では、私は「この人は鋭い痛みを感じている」と言う。私はそうすることで、他人の痛みを「鋭い」という語を当てはめる。しかし当てはめたのは私ではない。私は彼の言葉を真に受けているのだ。この点で「私は鋭い痛みを感じている」と「彼は鋭い痛みを感じている」には違いがある。

一般的に言って、次のことが言える——私以外の誰も、私がどんな種類の痛みを感じているか、言えない。また私の方でも、他人がどんな痛みを感じているか言えない。他人がチクチクした痛みを感じているか、シクシクした痛みを感じているかは、彼が言わない限り、私の知るところではない。私たちはいずれ、色々な語を使っ

て痛みを描写することを学ぶ。しかし上で述べた、できること・できないことの非対称性あるいは片寄りから、疑問が生じる。われわれはどうやって自分の痛みを描写することを教えられたのか。というのかわれわれは、ただ自分自身しかできないこと、つまり、自分の痛みの質を見極め、それを言葉で表すことを学ぶからだ。人は自分が描写できないものを、どうやって他人に描写するように教えるのだろうか。

ここで「内的状態には外的基準が必要である」というテーゼを一般化する人は、ある表され方をする痛みの質に、外的基準を要求するだろう。これはつまり、ある痛みへある語を適用することを説明できる、外的基準を要求するだろう、ということである。

痛みの質を表す言葉の、痛みへの適用を説明する基準があるなら、どういうものか。二つの考え方が候補に挙げられる。

(a) 「鋭い」の痛みへの使用には、他のものへの使用基準が援用される。

(b) 「鋭い」の痛みへの使用は、痛みの原因が基準となる。

6 痛みの描写の説明基準 (a)

(a) について。これは、「鋭い」を、ナイフやペン先へ当てはめるのと同じようにして、痛みへ当てはめると説明するものである。これによれば、まず「鋭い」という語を、ナイフやペン先へ当てはめることが習得されていなければならないだろう。これらの使用は、

鋭いナイフや鋭いペン先を例示しながら、教えることができる。この意味で、これらの使用には外的基準がある、と言える。そして、このように教わった「鋭い」の使用を応用し、同じように痛みに当てはめればよい、というわけである。

しかし、基準の考えを一般化する立場からすると、どうか。「鋭い」をナイフに使用すると同じように、痛みにも使用する、というとき、何をもって「同じ」と考えればいいか。

以下はヴィトゲンシュタインからの引用である――

：「君はもちろん「ここは5時だ」がどういう意味か、分かっているだろう。だから「太陽の上で5時だ」がどういう意味かも分かるわけだ。それはただ、そこでの時刻が、ここで5時であるときと同じだ、ということだ。」――同一性による説明は、ここでは成り立たない。というのも、ここでの5時とそこでの5時が「同じ時刻」と言えることは、確かに分かる。しかしどんな場合に、このこととこの時刻が同じと言えるかが、まさに分からないのだ。^⑩

ここで言われていることは、こうである。地球での時刻を太陽に適用しようとしても、太陽への適用の基準が用意されていない。地球での時刻は、太陽の南中を基準にして設定されている。しかし太陽は自分自身には南中しないため、同じ仕方で太陽での時刻を設定することはできない。だから、地球上のある地点で5時であるのと同じように太陽で5時だと言っても、どういふことか理解できない。

「鋭い」の使い方についても同様である。「痛みが、鋭いナイフと同じようなら、痛みにも同じ語を当てはめればいい」とされた。同じものには同じ語を当てはめればいい、というのは明らかである。明らかでないのは、何をもって同じとするかだ。あるいは、何をもって似ているとするか、でもよい。ナイフの鋭さにも、目に見える鋭さと、手で触れて感じられる鋭さがある。視覚的な鋭さと触覚的な鋭さは、「同じ」だろうか。同様に、それらは痛覚的な鋭さと「同じ」だろうか。同じとはどういうことだろうか。ここでは、どういうことが同じなのか、基準が足りない。基準の要請を一般化するなら、このように言いたくなる。

7 痛みの描写の説明基準 (b)

(b) について。これは、鋭い痛みとは、鋭いもので切ったとき・切られたときの痛みだ、と説明する考えである。これによれば、痛みの質の基準は、痛みの原因である。

ナイフで怪我をした子供に、「いまのが鋭い痛みだ」と教える人がいるかもしれない。場合によっては、この子は、これがきつかけで、鋭い痛みがどういう痛みか、分かるようになるかもしれない。しかし、このときの、この子供の痛みは、鋭いものだったと、断定できるだろうか。

ハンフリングは言っている――「a stabbing, a grinding or a burning pain」は、それぞれ、「短剣、ドリル、薪の燃えさし」が生

じさせる種類のものだ、というギルバート・ライルの説明は、事実の観察でなく、説明欲しさが動機となっている。」^①

鋭いものが起こす痛みが、鋭い痛みだとしてみる。するとたとえばナイフで怪我をしたときに、「鋭い痛み」と言うのが、規則にかなった使い方である。それなら、鋭いものによって起きなかった痛みにも「鋭い」を当てはめることは、基準から外れた使用になるだろうか。鋭い痛みは、その原因が鋭いものではないときにも、いくらかでも起こる。氷を長時間、握ったときに、鋭い痛みの感覚が生じるかもしれない。頬に食らった平手打ちの痛みも、鋭いかもしれない。

また、鋭いものが原因となった痛みでも、鋭く感じられないものもある。鋭利なナイフで果物を剥いている。鈍痛を感じる。手元が狂ったのだ。指先を見ると、血がにじみ出てくる。しばらくすると傷口がズキズキ痛む。——という場合である。

ならば原因による説明に一つステップを足して、「鋭いもので切られるような痛みが、鋭い痛みだ」とすればどうか。これは、あるものを「Aのような」と説明する仕方である。基準の要請を一般化するなら、ここでは「A」の基準、および「ような」の基準が要るだろう。そこでまず言えることは、ナイフの切り傷が原因で起こる痛みにも、いろいろある。ナイフで切られるようなとき、ナイフが原因となる痛みのうち、どういう痛みが典型にされるか、基準が定かでない、ということだ。次に、ナイフで切られるようなとき、「ような」の基準が定かでない。これもまた「太陽で5

時とは、地球で5時であるようなものだ」と変わりがないのではないか。

8 結語——痛みの描写の実際

内的状態には外的基準が要るとされた。一般的な痛みの概念は、（それが起こる状況も含めた）痛みの振る舞いが、基準を与えるものだと考えられた。痛みの概念は、このような基準を通して教えられる。これと比べて、痛みの質の場合、たとえば鋭い痛みを指し示しながら、それを説明することはできない。鋭い痛みの説明があるなら、それは鋭い痛みのサンプルがない説明であろう。しかし、そのような説明は、そのままでは、それが説明する言葉（この場合、「鋭い痛み」とともに、宙に浮いたままである。

では私たちは、実際どのようにして「鋭い痛み」という表現を使っているのか。端的に、次のように、である。

他人の痛みがどう感じるか、誰も本人に代わって表せないということは、それぞれの人がそれぞれの痛みを、自分で、「鋭い」とたとえ表すということだ。「鋭い痛み」という表現は、ナイフなどに「鋭い」を使うことを学んだときにのみ、そのような使用を通して、使えるようになっていくだろう。そのような使用を学んだうえで、「鋭い」という語が適していると、自然と思われる痛みがある。これを「言語の中の自然」と呼んでもよい。すなわち、説明はこれ以上、進まないのだ。そして、そういう痛みには、「鋭い」を当てはめる。

以上が、自分の痛みを表す人がすることである。他方、ナイフなどへの適用基準に照らして、「鋭い」という語を正しく使える人が、「鋭い痛みを感じる」と言えば、われわれはふつう、その言葉を受け入れるのである。これが、他人の痛みの表現を聞く人が、することである。

「鋭い痛み」という表現の使用が、このようなものなら、痛み以外の使用で「鋭い」を習得した人が、鋭いと思う痛みがあれば、それは鋭い痛みである。またある人の痛みが鋭いものであるなら、当人はそれは鋭い痛みだと思っている。(当人が思っていることを通してのみ、われわれは彼の痛みが鋭いものであると分かるからだ。)さて、ただ思うことと、そうであることの区別が、と言われている。冒頭の考えによれば、まず、「鋭い」をどの痛みに適用するかを説明する規則がある。どんな痛みが鋭い痛みかは、規則に従うことの実践の中で定められている。そのような鋭い痛みは、「鋭い」を当てはめるのが正しい使用であり、それは「鋭い」が適していること、ただ自分に思われるだけのことは違ふのだ、とされる。

しかし上で見たように、痛みの質の表現では、「鋭い痛みだと思ふ」と「鋭い痛みである」との区別は、意味を持つようには思われない。鋭い痛みは本人と独立には同定されないからだ。痛みを感じている当人が言うこととは独立に、どの痛みが鋭いかを教えてくれる基準はない。このかぎりでは、痛みの描写を学ぶことは、「...と思うこと」と「...であること」を区別する、本人とは独立の、公的規則に従った適用を学ぶことではない。どんな痛みにどんな語

を適用すればよいかを、人に説明できるなら、それは外的基準を通してできることではない。痛みの描写が難しい理由は、ここにある。また、「鋭い」という語が適していると当人が思う痛みが、鋭い痛みなら、その語がある痛みを正しく描写しているかどうかは、言えないことになる。なぜならふつう、ある人が正しいということは、彼とは独立の基準に照らしてされる判断だからだ。実際この意味で、痛みがどう感じられるかについて、描写が正しいかどうかは話さないものだ。他の多くの描写とは異なり、痛みの場合は独立の基準に照らしての描写の正しさは問題にならない。痛みの描写は、また異なった描写の言語ゲームなのだ。

私の主張は、単純に、次のように解釈される危険がある。「X」という語の使用を学んだ者が、その使用を、例えば痛みに対して拡張する場合があり、このとき、この人が自分の痛みの描写に「X」が適していると思えば、彼の痛みはXなのである、と。そして、これまでは「鋭い痛み」という、既に定着した表現を例に議論が進められてきたが、同じ理屈に従えば、痛みの種類には、赤い痛みも、高い痛みも、回転する痛みもありうると言わざるをえなくなる、と指摘されるかもしれない。もちろん、私はそのような主張をしているのではない。「赤い痛みを感じる」と言う、まれな人が現れる可能性は否定できないとしても、このような表現が我々の言語に流通するようになる保証はない、ということは重要である。赤い痛みを感じるという人の言葉は、実際、空しい訴えに終わるだろう。「赤い痛み」という表現は、我々の言語に痕跡を残すことなく、

消え去ってしまうだろう。しかし、このような表現が理解されるかどうかは、基準によって、あらかじめ判断できない。

次の例を出しておきたい。長時間、同じ姿勢で座っていた子供が、母親に「足が炭酸になった」と言ったという。この子は、炭酸飲料がどういふ飲み物かを知っているだろう。それを知ったうえで、しびれ感覚がどう感じられるかを「炭酸」という語で表した。これを聞いた大人は、「炭酸」という語が規則に反して使われたとは批判しないだろう。それどころか、この場合、この表現が定着しても不思議ではないと思われるほど、全く適した使用だとさえ感じるかもしれない。しかし感覚に対する、このような言葉の使用に、文法規則の観点から分析を試みても、得られるものは少ないと思われる。ここでは、何か別の観点が要求される。痛みの質の描写、またそれを理解することは、「炭酸」のこのような使用例としばしば似ている。

ファイザーという研究者は、痛みの表現について、劇的ではあるが、こう言っている——「私の言葉遣いは、ここでは創造に近い。ここにはチェックというものはない。私的的確に言葉を使っているなら、それは私にそう見えるからだ。」また「……痛みを理解することとは、どのようにしてプライバシーの問題が生じるかの説明に役立つ。私が言うことの外的なチェックや確認はないのだ。」⁽⁵⁾これらの言葉は、受け止めるべき価値を持っていると思われる。

以上、「従っていることと、そう思っているだけのことを区別する、公的基準が、内的状態を表す語には必要である」という考えの

一般化傾向を、考察した。結論を繰り返しておくなら、この傾向は、内面に関する言語ゲームを、ひいてはおそらく言語全体を、十分に見渡しているのではない。そして言語使用の全体像を得るには、言語規則だけに頼らない観点を持たなければならない。

注

- (1) 原文では、「状態」でなく「過程 (Vorgang)」となっている。
- (2) Paul Johnston は「私と似た関心を持っており、文法規則とは別の観点から、内面に関する言語使用を考察している。 Cf. Paul Johnston, *Wittgenstein: Rethinking the Inner* (London: Routledge, 1993).
- (3) 丸田「言語はどの程度規則に支配されているか」(『年報人間科学』(大阪大学人間科学部)、一九九六年)では、規則中心的言語観の批判を試みたが、本小論は「この批判を多少かながらならに展開しようとするものである」。
- (4) L. Wittgenstein, *Zettel* (Oxford: Basil Blackwell, 2nd edn 1981; 1st edn 1967), § 472.
- (5) P. T. Geach (ed.), *Wittgenstein's Lectures on Philosophical Psychology*: 1946-47 (Chicago: The University of Chicago Press, 1989) には、関連の話題が取り上げられている。⁶この講義録について詳しい考察は、別の機会に譲りたい。
- (6) L. Wittgenstein, *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, vol. 1 (Oxford: Basil Blackwell, 1982), §§ 617-8.
- (7) Wittgenstein, *Zettel*, § 553.
- (8) K. B. Fieser, "Privacy and Pain", *Philosophical Investigations*, vol. 9, (1986), p. 17.

- (6) R. Melzack and P. Wall, *The Challenge of Pain* (Harmondsworth: Penguin, 2nd edn 1988, 1st edn 1982), p.41.
 - (10) Melzack and Wall, *op. cit.*, p.40.
 - (11) 質問紙のサフ・クラスの区切りは、ヤニ・クロンによる区切りではなかった。
 - (12) Melzack and Wall, *op. cit.*, p.36.
 - (13) Fiser, *op. cit.*, p.14.
 - (14) V. Woolf, "On Being III", in *The Crowded Dance of Modern Life* (Harmondsworth: Penguin, 1993), p.44.
 - (15) 清原迪夫編『痛みの周辺』UP選書、東京大学出版会、一九七八年、を参照した。
 - (16) I. Wittgenstein, *Philosophical Investigations* (Oxford: Basil Blackwell, 2nd edn 1958; 1st edn 1953), § 350.
 - (17) O. Hanfling, "I Heard a Plaintive Melody": (*Philosophical Investigations*, p.209), in A. Phillips Griffiths, ed., *Wittgenstein Centenary Essays* (London: Cambridge University Press, 1991), p.125.
 - (22) Fiser, *op. cit.*, p.5, p.13.
- 木橋田崎
- Fiser, Karen B., "Privacy and Pain", *Philosophical Investigations*, vol.9, no.1, (1986, pp.1-17).
- Geach, P. T. (ed.), *Wittgenstein's Lectures on Philosophical Psychology: 1946-47* (Chicago: The University of Chicago Press, 1989).
- Griffiths, A. Phillips (ed.), *Wittgenstein Centenary Essays* (London: Cambridge University Press, 1991).
- Hanfling, Oswald, "I Heard a Plaintive Melody": (*Philosophical Investigations*, p.209), in A. Phillips Griffiths, ed., *Wittgenstein Centenary Essays* (London: Cambridge University Press, 1991, pp.117-33).
- Johnston, Paul, *Wittgenstein: Rethinking the Inner* (London: Routledge, 1993).
- 清原迪夫編『痛みの周辺』UP選書(東京大学出版会、一九七八年)。
- 丸田 健「言語はどの程度規則に支配されているか」『年報人間科学』(大阪大学人間科学部)第17号、一九九六年。
- Melzack, Ronald and Wall, Patric, *The Challenge of Pain* (Harmondsworth: Penguin, 2nd edn 1988, 1st edn 1982).
- Wittgenstein, Ludwig, *Last Writings on the Philosophy of Psychology, vol.1: Preliminary Studies for Part II of the Philosophical Investigations / Letzte Schriften Über die Philosophie der Psychologie, Band I: Vorstudien zum zweiten Teil der Philosophische Untersuchungen*, G.E. von Wright and Heikki Nyman, eds., C. Grant Luckhardt and Maximilian A.E. Aue, trans (Oxford: Basil Blackwell, 1982).
- *Philosophical Investigations/ Philosophische Untersuchungen*, G.E.M. Anscombe, Rush Rhees and G.H. von Wright, eds., G.E.M. Anscombe, trans. (Oxford: Basil Blackwell, 2nd edn 1958; 1st edn 1953).
- Zettel, G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright, eds., G.E.M. Anscombe, trans. (Oxford: Basil Blackwell, 2nd edn 1981; 1st edn 1967).
- Woolf, Virginia, Woolf, "On Being III", in *The Crowded Dance of Modern Life*, Bowldy, Rachel, ed. (Harmondsworth: Penguin, 1993).

**The Language Game of Describing Pain:
Can the Requirement Be Generalized That
the Inner States Stand in Need of Outward Criteria?**

Ken MARUTA

The following thesis is often attributed to Wittgenstein: the inner state stands in need of public rules; to obey them is to be carefully distinguished from merely thinking that one does so. The tendency to generalize this requirement can be seen, for example, in the standard interpretations of Wittgenstein's so called "private language argument". I propose in this paper to reconsider this tendency. The reconsideration will be accomplished through the examination of the use of words in describing the quality of pain. Describing pain is often difficult even when speaking in one's native language. My argument is that this is because the use of words in this language-game is not taught using some criteria of application as characterized in the thesis under consideration. In order to obtain the *Übersicht* of language use, it is necessary to avoid a one-sided diet on a particular philosophical thesis.

Key Words

Wittgenstein, inner state, outward criteria, quality of pain